仕

三年

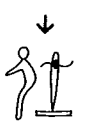
画数 5

筆順 ノ 亻 仁 仕 仕

オン シ・ジ

クン つか＝える

成り立ち



仕

〝十〟と〝一〟とを組み合わせて「一から十までものごとを知りつくした人」である〝役人〟といういみの〝士（4年528）〟と〝イ〟とを組み合わせて作った字です。

「人が〝役人〟となって〝つかえる〟」ことをあらわした字です。〝つかえる〟とは、目上の人や、社会の人びとのために〝用をする〟ことです。

また、「役所の〝しごと〟をする」ことから、「なにかをする」ことのいみにもつかわれるようになりました。

〔士には文官と武官とあり、武官は〝武士〟とも言われた。身分の上下により、〝上士〟〝下士〟と分けられる。上士は今の軍人の〝士官〟に当たり、下士は今の〝下士官〟に当たる、と言えよう。〕

使い方

▽ガスコーニュからパリに出て来たダルタニヤンは、王さまに仕える銃士になろうと思いました（アレクサンドル・デュマ『三銃士』から）。

▽ぼくは大きくなったら、車を作る仕事をしたいとおもいます。車が大好きだからです。今でも、色々な車の名前を知っています。

熟語例

▽仕官（官吏になること。役人になること。「若者は仕官の道をひっしになってさがしました」などというふうに、つかいます。）

▽奉仕（社会のためとか、目上の人などのために、力をつくし、身をささげること。「ナイチンゲールは、せんそうできずついた人々のために、身をすてて奉仕しました」などというふうに、つかいます。）

▽出仕（つとめ先に出かけること。また、民間から出て役人になることをもいいます。）

▽給仕（えらい人のそばに仕えてざつようをしたり、おきゃくの食べ物やのみ物をはこんだりする役目。また、その役をする人）

死

三年

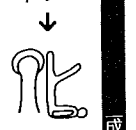
画数 6

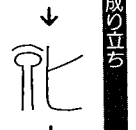
筆順 一 ア 歹 歹 死 死

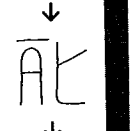
オン シ

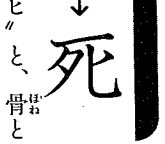
クン し＝ぬ

成り立ち









死

人がひっくりかえった形をあらわした〝匕〟と、骨という字の一ぶ（骨のつなぎめ・かんせつ）をあらわした〝歹〟とを組み合わせて作った字です。

〝歹〟は骨がこわれたことをあらわしていますので、「ひっくりかえった人が〝しぬ〟」ことをあらわしたものです。

また、「死んだ人のように〝やくにたたない〟」といういみにもつかわれます。

〔〝しぬ〟という訓は、実は〝死〟に〝去ぬ〟という和語を加えて〝死去ぬ〟としたものの、イがシに吸収されたものである。むしろ、音というべきものである。〕

使い方

▽おじいちゃんは、ぼくが五歳のとき、死亡しました。「おじいちゃんは死んで、どこへ行っちゃったんだろう」と考えると、かなしくなって、ひとりで、ふとんの中でなきました。

▽わたしのかわいがっていた犬の太郎が、死にました。十五歳で、犬としては、もうおじいちゃんだったので、ろうそくの火がきえるように、しずかに死にました。うらにわに、おはかを作って、お花をかざってやりました。

熟語例

▽死亡（死んで亡くなること。「死亡通知」といえば、死んだ、という知らせのこと。）

▽死別（死に別れること。「秋男は、三歳の時、母に死別した」などというふうに、つかいます。）

▽酔生夢死（生きている時には酔っぱらい、夢のうちに死んでしまう、ということから、ただ生きていたというだけの、つまらない一生のことをいいます。「人間、生まれたからには、酔生夢死の一生をおくってはつまらない」などというふうに、つかいます。）